

# 毎日新聞データからみた複文における「ついに」「とうとう」の差について —共起表現を中心に—

趙 恩英

## 1. 目的

「ある事態の実現に長い時間がかかる」<sup>1</sup>という特徴を持つ副詞に「ついに」「とうとう」がある。この副詞は、類義語<sup>2</sup>として互いに置き換えが可能な語として取り扱われてきたものの、両者の違いをはっきり示す検討はあまり見当たらない。

また、検討の対象である用例の抽出においては、先行研究では、主に小説とシナリオなどに焦点が当てられ、異なるジャンルである新聞記事を対象にしたものはあまりない。

これまで、「ついに」「とうとう」は、「時の副詞」<sup>3</sup>「アスペクト副詞」<sup>4</sup>と言われ、「～てしまう」を含むアスペクト形式との共起に分析の視点が置かれており、他の共起関係、特にどんな表現形式と共起しているかについての検討はあまりなされていない。

そこで、本稿は、新聞の用例を用い、複文の中に現れる「ついに」「とうとう」について、「ついに」「とうとう」の現れている節と、その前の節を検討することによって、「ついに」「とうとう」の違いをその共起表現から明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

長嶋(1982)は、「ついに」「とうとう」は、<実現した事態>についてそれがくふつうには実現しないと考えられていること>という特徴を持ち、話し手は<事態(状態)>が「尋常なことではない」と捉えている。そして、「ついに」は「とうとう」と

<sup>1</sup> 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』(長嶋善郎 1982 : p.171)

<sup>2</sup> 類義語: 語と語のあいだで、意味のかなりの部分が共通するとき、それらは類義関係にあると言い、互いに類義語と呼ぶ。『新版日本語教育事典』(遠藤裕子 2005 : p.278)

<sup>3</sup> 時間の語彙的表現のうち、述語のテンスやアスペクトに関与的であるものに、「時の名詞、時の形式名詞、時の副詞」がある。「時の副詞」に「基準時から動作や変化の起るまでの時間量」を表すものがあって、その中に、「ついに」「とうとう」が入る。「日本語の文の時間表現」『言語生活』(工藤浩 1985 : p.56)

<sup>4</sup> 「アスペクトの副詞」とは、事態の発生、展開(近接、継続、完了、反復、順序、など)に関する事柄を表すものをいう。『基礎日本語文法』(益岡隆志・田窪行則 1992 : p.45)

比べ、<事態（状態）の実現の瞬間に注目する>とし、「とうとう」は<事態が実現する過程に注目する>としている。また、「とうとう」は、「紆余曲折を経て」というニュアンスが伴うとしている。しかし、実際の新聞データから、「ついに」に、「とうとう」の持っている「紆余曲折を経て」というニュアンスがあるかどうかまでは述べられないが、(1)のように、「ついに」は「紆余曲折」という表現と共起するものがあつた。

(1) そして、ここでも、長い紆余曲折の後、ついに政府は彼らの信仰活動をとくに問題を起こさない限り黙認するようになった。(97年10月19日)

大里(1986)は、小説<sup>5</sup>を資料に、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」について検討し、「ついに」「とうとう」の共通点として、否定形式が可能で「～てしまう」の形式とうまく統合し、ある特定時点での結論意識が強調されるとしている。「ついに」は、(2)のように、「～ない」などの否定形式を伴った文に現出するのが普通で、この「ついに」の代わりに「とうとう」を代用することはほとんど容認されないのは、「未だ内面的再生せざる人に自己発見しようとする努力する「過程」を期待することはできないであろう」からであるとしている。そして、(3)のように、「ついに」は、「～だろう」と結び付いた表現が許され、「とうとう」は、ある事態へ向けての主体の意図的な「過程」が感知されない場合は使用されないと指摘している。しかし、「主体の意図的な過程」は如何なるものか、明示的に示されていない。また、「主体の意図的な過程が感知される」という文から「とうとう」の特徴が判断できるか、疑問である。

(2) 世間が期待する通りになろうとする人は遂に自分を発見しないでしまうことが多い。(大里1986:p.120)

(3) このような合同体は、論争を繰り返した挙げ句、ついに崩壊してしまうであろう。(大里1986:p.115)

李(2000)は、辞典での用例を基に38人にアンケート調査を行い、「ついに」「とうとう」は「ある事態・状態が実現するのに長い時間がかかった」点と下に打ち消しの言い方を伴う点ではほぼ同じであるとし、相違としては、「ついに」は実現した瞬間に重点が置かれている(結果重視)のに対し、「とうとう」は実現するまでの過程に重点が置かれている(過程重視)としているが、アンケート調査の項目となった例文は殆ど辞典での例文で実例が少なく、辞典での用例というのは制限が多いため、文脈上のこ

<sup>5</sup> 資料として用いられている小説は、遠藤周作『沈黙』(新潮文庫)、『悲しみの歌』(新潮文庫)、『口笛をふく時』(講談社文庫)、三木 清『人生論ノート』(新潮文庫)、大岡昇平『俘虜記』(新潮文庫)である。

などを念頭に置かず採用されるものが多いため、実例からも同じ結果が出るのか検討の必要があると思われる。また、(4)に対し、李(2000)は、「ついに」といえば、「人類は宇宙にまで行くようになったその瞬間のほうがより強く重視されての発話で、「とうとう」といえば「人類は宇宙にまで行くようになるまで」の紆余曲折の過程がより重視されての発話となるとしているが、このような解釈が、すべての「ついに」「とうとう」の用例に当てはまるか、そして、この文だけで、「ついに」「とうとう」の違いが分かるか検討の余地があると思われる。

(4) 人類は、…宇宙にまで行くようになった。(李 2000 p.130)

趙(2009)は、新聞データの用例を対象に、「ついに」「とうとう」は「なる」動詞との共起が多く、共起する述語は動詞のみではなく、「名詞+だ」もあること、そして、名詞止めにおいて、先行研究の指摘と異なって、「ついに」「とうとう」両方に現れると指摘している。しかし、「ついに」「とうとう」の出現傾向の検討にとどまっているため、「ついに」「とうとう」の相違点は明らかにされず、「ついに」「とうとう」と共起する表現まで提示されていない。

このように、先行研究は、「ついに」は事態が実現する「瞬間」に、「とうとう」は事態の実現までの「過程」に焦点があると言われてきたものの<sup>6</sup>、この指摘以外、「ついに」「とうとう」の違いを表わす共起関係の提示はなされていない。

そこで、本研究では、事態の実現までの過程とその実現する瞬間が同時に検討できると思われる複文を対象に、「ついに」「とうとう」と共起する表現を検討し、両者の違いについて見ていくことを目的とする。

まず、「ついに」「とうとう」の相違点だと言われてきた事態の成立までの過程と事態の実現する瞬間について見るためには、「ついに」「とうとう」の現れている節(以下、「ついに」「とうとう」節)と略す)のみではなく、「ついに」「とうとう」の現れている節の前(以下、「ついに」「とうとう」節の前)と略す)を検討する必要があると思われる。具体的には、(5)のように、「ついに」「とうとう」の現れている複文を対象に、「ついに」「とうとう」節と、その節の前を検討していく。

(5) 屋形舟は十分近く待ってくれたが、とうとう出航してしまった(96年9月8日)  
「とうとう」節の前                      「とうとう」節

<sup>6</sup> 『日本国語大辞典 第二版』の記述では、「ついに」について、「行為や状態が、最終的に実現するさまを示す。最後に。とうとう。結局。いよいよ。」とし、「とうとう」について、「物事の最終的な結果が現れるさまを表わす語。ついに。結局。とうと。」としている(『日本国語大辞典』2001)。辞典での記述も先行研究と違いが見られる。

検討の対象に、「ついに」「とうとう」の現れている文とその前の文、つまり、文単位で二つの文を見ないのは、(6)のように、「とうとう」の現れる文の前の文が、ある事態の実現(母の死)になっていて、事態の過程だと見るのは難しく、「とうとう」の現れている節は、事態の実現ではなく、実現したことに対する話者の気持ちを表しているためである。ある事態の過程、同時に、その過程を経て実現されたパターンが見られる文は複文だと思われるからである。

(6) 母は静かに逝ってしまった。とうとう来てしまった日に、なぜか、余り涙は出なかった。(95年4月11日)

そして、単文ではなく複文を検討するのは、新聞の用例において、「ついに」「とうとう」の現れている単文の場合、(7)(8)のように、文頭(又は、「見出し」)などに来ることが多いため、「ついに」「とうとう」の実現までの過程を検討するには、「ついに」「とうとう」の現れている文を超えた文章単位まで検討の対象を広げなければならないからである。

(7) [50年前] ついに上陸 【大阪】 (95年2月21日)

(8) [みんなの広場] 故郷の玄関・碓氷峠がなくなった=自営業・塚田稔・59

(茨城県土浦市) とうとう碓氷峠がなくなってしまった。私にとって、信越本線イコール碓氷峠だった。(97年10月5日)

### 3. 分析方法

#### 3.1. 用例について

分析の用例は、『CD-毎日新聞データ集』<sup>7</sup>から、95年から97年の3年分を利用し、新聞記事の種類の区別はせず、抽出した。抽出した用例の数は「ついに」1899例、「とうとう」304例である。

#### 3.2. 検討の対象について

本稿で検討の対象にする複文としない複文について述べる。まず、(9)のように、複文<sup>8</sup>の中であっても、文頭に現れ、「とうとう」節の前が存在しない文は、検討の対

<sup>7</sup> 用例は首都大学東京大学院人文科学研究科日本語教育学教室『CD-毎日新聞95・96・97年データ集(毎日新聞社)』から抽出した。総語数は、114,114,941語数であった。

<sup>8</sup> 「複文」とは述語を中心として組み立てられる構造体が複数個存在する文、すなわち、述語を中心としたまとまりが2以上集まって構成された文のことである。(省略)例：金星台のうえの再度山ドライブ・ウェーのそばにも展望台があり、ピーナス・ブリッジという優雅な陸橋がかかっているが、すこし高いので、そこからの眺めでは、町の呼吸はすでにかんじられない。(省略)「あり」、「か

象外とし、(10)のように、「とうとう」節の前が「会社の海外留学制度に挑戦し続けた」という過程を表し、「とうとう」節が「アメリカ行きを自分のものにした」という事態の実現を表すもの、(11)のように、「ついに」節の前が「大都市直下型地震を恐れていた」という過程を表し、「ついに」節が「その地震が起きた」という実現を表すものを検討の対象にする。

(9) とうとう解雇され、7カ月前に戻ってきた。(96年7月11日)

(10) 会社の海外留学制度に挑戦し続けた彼女は、とうとうアメリカ行きを自分のものにした。(96年4月16日)

(11) 恐れていた大都市直下型地震がついに起きた。(95年1月18日)

そして、「ついに」「とうとう」節の前とは、(12)「屋形舟は十分近く待ってくれたが」のような連用節、(13)のように、主名詞「彼女」を修飾する「会社の海外留学制度に挑戦し続けた」という連体節のことである。(14)のように、「ついに」「とうとう」節の前が複数存在する場合、実現までの過程の事態の検討は、複数の節を対象とする。

(12) 屋形舟は十分近く待ってくれたが、とうとう出航してしまった。

(96年9月8日、(5)の再掲)

(13) 会社の海外留学制度に挑戦し続けた彼女は、とうとうアメリカ行きを自分のものにした。(96年4月16日)

(14) 清水 DF の苦し紛れのクリアを横浜マは拾いまくって、圧倒的に攻めまくったが、ついに同点ゴールも奪えず前期優勝チームが3連敗。(95年8月24日)  
また、(15)のように、「ついに」の前の節が存在しないものは、対象外とする。

(15) 無党派層がついに動いた、と評されているが、ほんとうは、さんざんコケにされた大阪府民が、せめてもの「心意気」を示した、ということではないでしょうか。(95年4月16日)

### 3.3. 観点

「ついに」「とうとう」節を事態が実現される部分とし、「ついに」「とうとう」節の前を、事態の実現までの過程だとし、この実現と過程において「ついに」「とうとう」との共起関係を検討し、二つの副詞の違いと見なされる共起表現を探索的に検討していく。

---

かっている」、「高い」、「かんじられない」という4つの述語からなる複文である。『複文』(益岡隆志 1997 : p.1)

まず、過程を形式的な面から検討する。「ついに」「とうとう」節の前に、どんな節が現れるか、そこに「ついに」「とうとう」の違いが見られる節があるか検討する。

また、「ついに」「とうとう」の共通点として取り上げられている「事態の成立まで長い時間がかかる」という点について、それを「ついに」「とうとう」と共起する時間表現があるか検討する。時間表現の中は、文法カテゴリーのテンス、アスペクト、そして、時点と期間が含まれるが、本稿では、文法カテゴリーは含まず、時点と期間が数値で現れるもの、また、(16)のように、語彙レベルで現れる時間表現を「時間表現」とする。テンスとアスペクトに関するものは先行研究で検討されているため、検討外とする<sup>9</sup>。

(16) 西田ひかるとは、共通の話題を捜したはてについて見つからず、壁の時計に目をやっておしまい。(97年9月28日)

そして、「ついに」「とうとう」は、置き換えが可能な類義語であるが、実際に使われている用例の分析に重点を置くため、置き換えができるかどうかという置き換えテストは行わない。

## 4. 分析結果

### 4.1. 形式的な面から見た過程の現れ方について

ここでは、「ついに」「とうとう」と共起する表現を具体的に検討する前に、形式的な面で「ついに」「とうとう」節の前の違いについて検討する。

表1は、「ついに」「とうとう」の出現する用例を複文と複文ではない文に分けた表である。そして、表2は、複文を「連用節」「並列節」「連体節」<sup>10</sup>に分けて検討した結果を表す表である。表2から、連体節において、「ついに」「とうとう」の出現に差が出た。

複文に現れる「ついに」は、1140例、「とうとう」は、158例で、これらの複文の中、(17)(18)のように、「ついに」節の前が、連体節のものが、325例28.5%、「とうとう」節の前が連体節のものが、30例19.0%であった。「ついに」の方が「とうとう」

<sup>9</sup> 石川(2006)は、「ついに・とうとう・やっと・ようやく」とアスペクト形式との共起を検討し、「スル・シタ」の用例が、1062例(全体1211例の中から)で、その中、「ついに」は、487例、「とうとう」は、41例としているが、「スル・シタ」を区別して検討していないため、「ついに」「とうとう」の使い分けの有標的なマーカーとして、働いていないと思われる。また、趙(2009)は、「ついに」「とうとう」と共起する述語のテンスを検討し、過去形が、「ついに」は60.9%と、「とうとう」は81.5%という結果を出している。

<sup>10</sup> 益岡(1997)の従属節の類型によって分類した。

より比率が若干高かった。この28.5%と19.0%の数値は、これまで先行研究で、「ついに」「とうとう」の相違点として挙げられてきた「～てしまう」<sup>11</sup>との共起における比率より、その差は大きくないが、「ついに」「とうとう」の現れている複文の形式的な面の違いになると考えられる。

表1. 複文(外)に出現する「ついに」「とうとう」

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
複文	1140	60.0%	158	52.0%
複文外	759	40.0%	146	48.0%
合計	1899	100.0%	304	100.0%

表2. 「ついに」「とうとう」節の前の出現

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
連用節	815	71.5%	128	81.0%
並列節	0	0.0%	0	0.0%
連体節	325	28.5%	30	19.0%
合計	1140	100.0%	158	100.0%

ここで、「ついに」「とうとう」の「連体節」「連体節外」について、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $p < .001$  で有意差は認められた<sup>12</sup>。有意差が認められたことから、「ついに」の場合、「とうとう」より、その節の前に、連体節の出現頻度が高いということが言える。

(17) 会社の海外留学制度に挑戦し続けた彼女は、とうとうアメリカ行きを自分のものにした。 (96年4月16日)

(18) 昨季までにW杯通算30勝を挙げた大スターは昨年十二月末、ついに引退を表明した。 (95年1月21日)

一方、「ついに」「とうとう」節の前が、(19) (20) のように、「連用節」の場合、「ついに」「とうとう」の現れている複文の形式的な面での違いは連用否定形であった。「連用否定形」は、「ついに」815例の中、32例で3.9%、「とうとう」は128例の中、11例で8.6%であった。ここで、「ついに」「とうとう」の「連用否定形」「連用否定形外」の比率について、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $p < .001$  で有意差は認められた。有意差検定の結果から、「とうとう」の方が「ついに」より、その節の前に、連用否定形の出現

<sup>11</sup> 池田 (2000) は、『芥川全集第一巻～第三巻、第十五巻』『アエラ (930525号)』『シナリオ「寅さん」シリーズ』をデータとして、「～てしまう」との共起を検討し、「ついに」は8%、「とうとう」は25%の比率を、石川 (2006) は、『プロジェクトX-挑戦者たち (メディアミクス版)』をデータとして、「～てしまう」との共起において、「ついに」は2.4%、「とうとう」は8.1%の比率を、趙 (2009) は、『CD 毎日新聞データ集』の3年分をデータとして、「～てしまう」との共起を、「ついに」は4.6%と「とうとう」は13.0%の比率を出した。

<sup>12</sup> 「有意差が認められた」とは、「ついに」「とうとう」の連体節の比率の差がたまたま偶然であるものではなく、統計的に意味のある差であるということである。つまり、もっと大きな標本からの比率においても同じ結果が出るということである。

頻度が高いということが言える。

(19) しかし、マスコミはその実像をつかみ得ず、不気味な肥大化をついに察知できなかった。(95年8月30日)

(20) 都心の小さなベランダガーデニングでは飽き足らず、とうとうイギリスに留学、庭園史、園芸、植物画などを学んだ。(97年4月30日)

また、「ついに」「とうとう」の現れている複文の形式的な面での違いは、「ついに」「とうとう」節の前が、接続詞「が」で現れているものであった。<sup>13</sup> (21) (22) のような用例が、「ついに」は108例13.3%で、「とうとう」は22例17.2%であった。ここで、「ついに」「とうとう」の「接続詞「が」「接続詞「が」外」の比率について、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $p>.001$ で有意差は認められなかった。

(21) 清水DFの苦し紛れのクリアを横浜マは拾いまくって、圧倒的に攻めまくったが、ついに同点ゴールも奪えず前期優勝チームが3連敗。(95年8月24日)

(22) 橋本首相の政局音痴は前から分かっていたが、とうとう自ら掘った落とし穴に落ちた。(97年9月22日)

このように、「ついに」「とうとう」節の前において、形式的な面での違いは、「ついに」においては、「連体節」の出現、「とうとう」においては、「連用否定形」と「接続詞「が」」の出現であった。

#### 4.2. 実現までの過程の現れ方について

ある事態の実現に至るまでの過程の現れ方において、「ついに」「とうとう」の違いになる共起表現があるか検討した結果、「とうとう」は過程の事態を数値で表すものが多く、「ついに」は数値の代わりに、副詞的表現が使われ、過程の事態を表わしていることが分かった。下記の例を見てみよう。

(23) タスカ氏 日本企業は一人当たりの設備投資額を増大させて生産性を引き上げてきたが、経済学の教科書が言う通り利益は通減し、企業の効率は徐々に悪化、九〇年代についに表面化したのだ。(95年7月20日)

(24) 首尾良く地底監獄からドロンした22歳の美丈夫は、書記を振り出しに着々と出世街道を歩み、10年後にはついに裁判官。(95年10月2日)

(25) 処刑される人の9割近くが、貧しい劣悪な生い立ちから、次々と罪を重ねて、ついに極刑にたどり着くというフランスの元法相のレポートも思い出されま

<sup>13</sup> 「が」以外の他の表現は、「～ながら」が「ついに」に8例、「とうとう」に4例、「のに」が「ついに」に2例、「とうとう」に1例、「ので」が、「ついに」に4例、「とうとう」に1例あった。



す。(97年8月15日)

(26) 演歌チャートでもぐんぐん上位に上がってきて、ついに15万枚突破。(97年1月20日)

(27) 自信を持ってこの話をしているうちに仲間がどんどん増え、ついにクラブまで出来るほどになった。(97年12月21日)

(28) 階段を一歩一歩上り、今季ついに上位15人の第1シードまでステップアップ。  
(97年3月21日)

(23)は、企業の効率が悪化する過程を経て90年代に表面化した実現を表わし、(24)は、監獄からドロンした美丈夫が、出世街道を経て裁判官になった実現を、(25)は、罪を重ねる過程を経て極刑にたどりついたことを表わしている。そして、(26)は、15万枚突破した実現までの過程が、(27)は、クラブが出来る実現までの過程が、(28)は、上位15位の第1シードにステップアップした実現までの過程を表わしている。

このように、実現までの過程において事態の変化が、「徐々に」「着々と」「次々と」「ぐんぐん」「どんどん」「一歩一歩」などの副詞的表現で現れる場合は、「ついに」節の前のみであった。「ついに」節の前に副詞的表現が現れた用例は25例で、全体の用例1140例中2.2%の数値に過ぎないものの、「とうとう」節の前には、副詞的表現の出現は見られなかった。

一方、「とうとう」において、実現するまでの過程の現れ方は、「ついに」と異なって、具体的な数値で現れる傾向が見られた。下記の例を見てみよう。

(29) 仕方なく、車が1台、車が2台、とうとう100台数えたが、まだ頭はさえている。(96年9月7日)

(30) でも30になったし、31にもなったし、そしてとうとう50になった。(97年8月24日)

(31) 小さい木に3年前は1個、2年前は2個なり、去年はとうとう30個以上実がつけました。(97年1月22日)

(32) 1994年12月結党の新進党支持率は、95年9月に最高の15%となってから低落傾向が続き、とうとう5%と3分の1に落ちた。(97年8月29日)

(33) PHSの加入数は、1995年度末の150万8000から96年度末には603万へ一気に4倍に膨れ上がったが、今年度に入ってから増加数が毎月減り始め、10月末にはとうとう純減となった。(97年11月11日)

「とうとう」節の前は、(29)から(33)までのように実現までの過程の変化が数値で現れていることが多い。(29)は、100台数えるまで、1台、2台と数値で過程を表

し、(30) は、50 になるまでの過程を、30、31 と数値で示し、(31) は、3 年前は 1 個、2 年前は 2 個になった過程を経て、30 個以上の実がついた実現を表わし、(32) は、5% で実現されたものが、15% の過程を経たことを表わし、(33) は、純減するまでの過程を数値で表す例である。このように、数値で過程の事態が現れているのは「とうとう」の方で、全体の用例 161 例中、10 例 6.3% で、実現するまでの過程において、その過程の現れ方から「ついに」「とうとう」の差が見られた。

そして、参考データとして、『CD-ROM 新潮文庫』<sup>14</sup>での「ついに」「とうとう」を検討し、新聞データと比べてみた。検討の結果、副詞的表現の現れ方において小説でも違いが見られた。「ついに」と共起する副詞的表現は、(34) のように、「だんだん」の用例が 2 例、「一步一步」が 2 例、「次々」が 1 例、「どんどん」が 1 例、あったものの、「とうとう」の場合、副詞的表現との共起は見られなかった。

(34) 庄九郎は、杯をかさね、語るほどにだんだん酔ってきて、ついに大酔した。(『国盗り物語』)

このように、「ついに」と副詞的表現との共起は、ジャンルによって違いは見られなかったが、「とうとう」の場合は、ジャンルによって数値的な表現との共起に違いが見られた。

#### 4.3. 過程の結果を強調する表現について

ここでは、「ついに」「とうとう」節の前に現れている過程の最終段階を強調する表現について検討する。下記の例を見てみよう。

(35) 後援会の裏献金問題で窮地に立った大阪府知事は、かなりねばった末についに次回選挙への不出馬を決意。(96年2月26日)

(36) 西田ひかるとは、共通の話題を捜したはてについに見つからず、壁の時計に目をやっておしまい。(97年9月28日)

(37) 性狷介(けんかい)で、小心翼翼としているのに、自らの文学的才能をたのみすぎた結果ついに虎に姿を変じてしまう主人公をどう思うか、と問われ、私はそのくらいの執着心がなければ文学なんてできないんじゃないですか、と答えて教師を鼻白ませた。(96年2月27日)

<sup>14</sup> 首都大学東京大学院人文科学研究科日本語教育学教室の所有の『CD-ROM 新潮文庫』で、戦後の作品から用例を抽出した。「ついに」「とうとう」の総用例数は、「ついに」が 660 例、「とうとう」が 185 例であった。その中、複文で出現したものは、「ついに」が 422 例、「とうとう」が 84 例で、名詞節以外の用例が「ついに」が 374 例、「とうとう」が 70 例であった。

(38) たとえばロイヤル・セントジョージズで行われた1981年の全英オープンでは、王者ニクラスが「5」と「6」とか、とても親しみやすいスコアを連発した挙げ句、ついに11番ホールでは2ケタの「10」まで記録、ギャラリーのあいだからホッと安堵（あんど）の吐息がもれたものである。（97年6月9日）

「ついに」節の前は、(35)のように、大阪府知事が出馬のため、かなり粘った過程を経て最終的に不出馬を決意した事態を表わしている。粘った過程の末にという意味で、「～末に」が使われ、(36)は、共通の話題を探した過程を経たが実現されなかったことを強調するために、「～果てに」が使われ、(37)は、自らの文学的才能をたのみすぎて虎に姿を変じた事態を強調するため、「～結果」が使われている。そして、(38)は、親しみやすいスコアを連発した過程を強調するため、「挙げ句」が使われている。

このように、「～末に」「～果てに」「～結果」「～挙げ句」などは、ある過程を経て実現された事態が、その過程の経過の最終段階であることを強調する際に使われる表現である。このような表現は、「ついに」節の前のみ見られた。用例の数は、全体1140例中、18例1.6%で、数値的には少ないものの、「とうとう」節の前には現れなかったため、「ついに」「とうとう」の違いを表わす共起表現だと思われる。

そして、参考データとして小説を検討した結果、「ついに」の場合、同じ傾向が見られたが、「とうとう」の場合、新聞では見られなかった「末」との共起が見られた。小説では、「ついに」と「末（に）」との共起が5例、「あげく」との共起が3例、見られ、(39)のように、「とうとう」と「末」との共起が1例あった。この結果から、過程の最終段階を強調する表現との共起は、「ついに」においては、新聞と小説の違いはないものの、「とうとう」においては、ジャンルでの違いが見られた。

(39) 山本は真ッ向から反対し、桂陸相大山参謀総長との間で、取り消せ、取り消せないともめた末、とうとう、「海軍は、素姓の怪しい武装員を乗せた船が、海上を彷徨しているのを認めた場合、海賊船としてこれを撃沈することがある。平素海賊船の取締りを厳しく命令している以上、大臣としてこれを咎める言葉はない。このへんのところは、篤と御承知の上で行動されたらよからう」と言って立ち上ってしまい、驚いた首相と陸相が山本を引きとめ、大山総長は宮中に伺候して、先の允裁取消しを願わざるを得なくなり、問題は一日で解決したという。（『山本五十六』）

また、(40)のように、「最後に（は）」「最後まで」「最終局面」という表現は、「ついに」「とうとう」、両方に使われ、「ついに」は、15例で1.9%、「とうとう」は、8例で6.3%の割合で「とうとう」の方が高かった。「とうとう」の場合、上記の「最後

に(は)」「最後まで」「最終局面」と共起しているが、「ついに」の場合は、(41)のように、「最終段階」「最終回」「最終局決戦」「最終戦」「最終日」のような多様な表現と共起していることが分かった。

(40) 94年の初演以来、東京はじめ世界各地を回り、その都度中身が膨らんで、最後はとうとう8時間の舞台になった。 (96年11月16日)

(41) 毎年冬になると7、8回は通うグレンデにも、昨年は開発の最終段階と重なったため、ついに一度も行けなかった。 (97年3月14日)

#### 4.4. 「紆余曲折」について

長嶋(1982)は、「とうとう」は「紆余曲折を経て」というニュアンスがあると指摘し、李(2000)は、「とうとう」の方に「紆余曲折の過程がより重視されての発話」だとしている。ここでの紆余曲折とは、実現するまでの過程から読み取れる意味だと思われる。

しかし、新聞データにおいては、(42)のように、「ついに」節の前に「曲折」という表現が現れており、また、(43)のように、「ついに」節に「紆余曲折」という表現が現れている。このように、「ついに」は、具体的な表現で「(紆余) 曲折」が使われていることが今回の調査で見られた。一方、「とうとう」の場合、「紆余曲折」という表現との共起は見られなかった。

(42) そして、曲折を経ての最終回、ついに演奏会の日がやってきたのである。 (97年3月14日)

(43) 風が東へと吹いているうちは対岸の火事の英仏、炎が軒先まで舐(な)めても赤化に脅えてソ連の援助を拒む小国群、黒煙渦巻く喧噪(けんそう)のなかで脱出路を求めてもがき抜いたソ連外交が、ついに独ソ不可侵条約という意想外の出口へと走る紆余曲折のおもしろさ。 (95年6月5日)

「紆余曲折」との共起について、参考データである小説を検討した結果、小説では「ついに」「とうとう」、両方とも「紆余曲折」という表現との共起は見られなかった。この結果から、「紆余曲折」と「ついに」との共起は、新聞のみの特徴であると思われる。新聞の文体の特徴、つまり、紙面の制限などによって、過程の事態から「紆余曲折」の意味を表わすよりは、「紆余曲折」表現を直接使うことによって、「紆余曲折」さを表わしていると思われる。

## 5. 考察

「ついに」「とうとう」節とその節の前の形式的な面から考えられる「ついに」「とうとう」の違いについて考えていく。

まず、「ついに」の方が、「とうとう」より、事態の過程の現れ方より、過程の主体である主名詞に焦点が置かれやすいことが分かった。

この結果は、下記の文型のように、これまでの先行研究で言われてきた「ついに」は瞬間に、「とうとう」は過程に焦点があるという指摘の形式的な特徴を初めて示した結果だと思われる。それは、連体節は単文的な性格があつて、 $v_2$ に重点が置かれやすく、連用節は、 $v_1$ にも重点が置かれやすいと思われるからである。

・ $\sim v_1 N$ は、ついに  $\sim v_2$ 。

・ $\sim v_1$ 、とうとう  $\sim v_2$ 。

下記(44)のような連体節を(45)のように連用節に書き変えても、意味的に大きな差はないと思われる。しかし、ある事柄を認識し、それを表現する際、話し手又は書き手がどこに焦点を当てて、その事柄をどう捉えるかによって、連体節になったり連用節になったりするため、焦点の当てる部分と事柄の捉え方が違っていると思われる。つまり、「悲運に苦しみ抜いてきた金氏」という過程により焦点があるか、「苦しみ抜いてきた金氏が夢を果たしたこと」に焦点があるか、によって、連体節か、連用節か、になるとと思われる。(44)(45)の中、(45)が選択されたのは、事態の実現する瞬間に焦点を当てて事柄を捉えたためだと思われる。

(44) 世にもまれな悲運に苦しみ抜いてきた金氏が、ついに夢を果たしたことの結果なのだろう。(97年12月23日)

(45) 金氏は世にもまれな悲運に苦しみ抜いてきて、ついに夢を果たしたことの結果なのだろう。(作例)

そして、「ついに」「とうとう」に差が出たのは、(46)(47)のように、「とうとう」節の前に、連用否定形と接続詞「が」であった。これらの使用は、実現するまでの過程において、その過程の事態が否定されて実現したり、過程の事態とは逆の事態で実現したり、新たな実現の事態が現れたりすることが多いことである。

(46) 暴力団の影にもめげずとうとう“外車差別”を一掃したというのである。

(96年4月7日)

(47) 屋形舟は十分近く待ってくれたが、とうとう出航してしまった。

(96年4月26日)

述語と打ち消しと共起する場合、期待されていたことが最後に実現されなかったこ

とを表わす場合に使われると言われているが、連用否定形が使われたことは、(46)のように、期待されるかどうかは関係なく、事態が過程に影響されず（暴力団の影にめげると予想がしたかもしれないが）、実現されたことを表わしていることである。そして、(47)のように10分待っていたが、出航したことを残念な気持ちで表現している場合、期待とは逆の実現が起こったことを表わしている。期待されたことが実現されたり、実現されなかつたり、するより、期待という気持ちとあまり関係なく、実現されたり、期待とは逆に実現されたり、する際、「とうとう」が使われると考えられる。

一方、「ついに」の方は「とうとう」より、実現までの過程において、副詞的表現との共起と最終段階を表わす時間的表現との共起がみられた。そして、「紆余曲折」ということばと共起していることが分かった。(48)のように、「次々と」という副詞的表現を使って「罪を重ねる」ことを強調している。この副詞的表現を使うことによって、過程の事態の程度が強調され、このような過程を経て、実現されたということに、より焦点を当てる効果があると思われる。

(48) 処刑される人の9割近くが、貧しい劣悪な生い立ちから、次々と罪を重ねて、ついに極刑にたどり着くというフランスの元法相のレポートも思い出されま  
す。(97年8月15日、(28)の再掲)

また、最終段階を表わす「最後(に)は」「最後まで」「最終局面」との共起は、「ついに」「とうとう」で共通に現れる時間的表現であるが、「ついに」の場合、最終段階をもっと多様な表現で表している。これまで「長い時間がかかる」ことが共通点であると言われてきたが、その時間がかかったことを時間的表現で表すのは、「ついに」の方であった。

そして、「とうとう」の方は、「ついに」より、(49)のように、過程を数値で表し、その過程を数値で詳しく表している。この点から、「とうとう」の方が、過程の捉え方において、「ついに」より、具体的だと思われる。過程の数値の加減を詳細にすることによって、実現までの過程の事態がより鮮明に見えてくるとと思われる。そして、(50)のように、「とうとう」は、「ある記録の単純な報告」の内容よりは、内容を詳細に説明する時に使われ、事態の過程を具体的に表す場合に使われると思われる。

(49) でも30になったし、31にもなったし、そしてとうとう50になった。

(97年8月24日、(33)の再掲)

(50) これを奪取するや、翌九二年に王座獲得、九三年に入り竜王を谷川から奪回、またたく間に棋聖・王位を手中にし、さらに九四年にはとうとう名人位を米長邦雄から奪った。(96年2月19日)

このように、先行研究で「ついに」は「瞬間」、「とうとう」は「過程」と言われてきたことと同じ解釈が可能な形式的な特徴を示した。そして、実現までの過程の現れ方の違いと共起表現は、ジャンルによって異なっていることを指摘した。特に、「とうとう」は、実現までの過程の現れ方を数値で具体的に表わすのは、新聞のみの特徴であり、副詞的表現との共起も、ジャンルごとに共起が異なっている。つまり、「ついに」「とうとう」は、ジャンルごとにその差が出やすい副詞だと言える。

最後に、「会話文」での「ついに」「とうとう」の出現について検討した結果を表 3 にまとめた。

表 3. 会話文での「ついに」「とうとう」の出現

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
複文	37	41.6%	7	20.0%
複文外	52	58.4%	28	80.0%
合計	89	100.0%	35	100.0%

先行研究<sup>15</sup>では、「とうとう」の方が「ついに」より「会話文」に多く出現すると指摘している。今回、「ついに」「とうとう」の「会話文」での出現を検討した結果、(S1)のように、「とうとう」は、「複文外」で8割の割合で現れた。「とうとう」が、会話文に多く出現する際、複文より、複文外に、特に、文頭に多く現れている。「ついに」「とうとう」を複文と複文ではない文に分けて検討することによって、「ついに」「とうとう」の「会話文」での出現の傾向が見えたと思われる。

(S1) その三カ月後、今度は本条さんの体を病がむしばんだ。とうとう私もあの病気に…… (95年7月5日)

以上、形式的な面と共起関係、そして、会話文を検討し、「ついに」「とうとう」の差について見てきた。新聞というジャンルにおいて、「ついに」「とうとう」の違いは、複文の形式的な面と共起表現から分かるとと思われる。

## 6. 問題点と今後の課題

本稿は、新聞データ3年分から用例を抽出したため、新聞データでの「ついに」「とうとう」の差にとどまったと思われる。そして、用例の検討は全ての用例ではなく、

<sup>15</sup> 石井 (2006) は、「ついに」が3.3%、「とうとう」が21.7%、趙 (2009) は、「ついに」4.7%、「とうとう」11.5%という結果を出している。

複文、それも、「ついに」「とうとう」節と「ついに」「とうとう」節の前が確認できるもののみ検討の対象としたため、全ての「ついに」「とうとう」と共起する表現の提示だとは言えない。

また、接続詞「が」の場合、形式だけを検討したため、逆接の意味・前置きの意味で使われている用法を区別して検討することまでは至らなかった。そして、接続詞「が」以外の表現を詳細に検討することもできなかった。

しかし、限られた用例・条件の中、新聞データで「ついに」「とうとう」と共起する表現をいくつか示すことができたと思われる。

これまでの先行研究では、「ついに」は「瞬間」に、「とうとう」は「過程」に焦点があるという指摘だったが、今回の検討で先行研究の指摘の裏付けができ、「ついに」「とうとう」の違いはジャンルによって異なることが分かった。そして、新聞での「ついに」「とうとう」の共起表現について提示することができたとと思われる。

これからは、他のジャンルでの「ついに」「とうとう」の差を意味的な観点から明らかにしていきたい。特に、他の副詞的表現と時間的表現を中心にしていきたい。

## 参考文献

- 池田英喜 (2000) 「ツイニ・トウトウ」小考『留学生センター紀要』第2号、新潟大学留学生センター
- 石川潔 (2006) 『副詞「ついに・とうとう・ようやく・やっと」の意味と用法』桜美林大学2005年度修士学位論文
- 遠藤裕子 (2005) 「語と語の関係」『新版日本語教育事典』日本語教育学会(編)大修館書店
- 工藤浩 (1985) 「日本語の文の時間表現」『言語生活』通号403 筑摩書房
- 高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子 (2004) 『新・はじめての日本語教育基本用語事典』アスク
- 趙恩英 (2009) 「類義語「ついに」「とうとう」の相違について—新聞記事における使用頻度から—」『日本語研究』第29号 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- 長嶋善郎 (1982) 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味3辞書に書いてないこと』国広哲弥 編 平凡社
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版



森田良行 (1984) 『基礎日本語辞典』 角川書店

山本雅子 (2007) 「副詞表現の認知的意味機能「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」  
『言語と文化』 No.16(通 43) 愛知大学語学教育研究室

李建華 (2000) 「副詞「ついに」「とうとう」「やっと」「ようやく」の異同について」『茨城  
キリスト教大学紀要』 No.34

劉笑明・吉田則夫 (2006) 「情意表現における副詞の働きについて」『岡山大学教育学  
部研究集録』 第 131 号 岡山大学教育学部

(ちょうによん・首都大学東京大学院生)